国語科における資質・能力の育成

刻々と変化する社会のなかで，将来の社会を生きていく子どもたちを育てるために，学校教育段階で育成する「資質・能力」の方向性として，今年度の国語科では，ひとまず，「思考力」「活用力」「コミュニケーション力」「相手意識」「メタ認知」の五つの柱を設けてとらえ，考えることとした。これらは，従来までの研究を引き継いではいるが，現時点で，さらにその範囲を押し広げる方向で検討している。例えば，「思考力」と「活用力」では，国語科の内容についての思考や学び取った内容を活用させることだけでなく，学び取り方の選択という側面やその関連性も視野に入れながらとらえることとした。「コミュニケーション力」や「相手意識」に関しても，今後，情報化やグローバル化が一層進むと考えられることから，授業における子ども同士のコミュニケーションやその文脈での相手に対する意識を基本に据えながらも，紙や電子媒体等，様々な媒体の特徴に応じた「コミュニケーション力」や，その中で広がる様々な相手を想定した「相手意識」をも含めて考えている。加えて，学んだ事柄や学ぶプロセスにおける自らの状況を俯瞰的にとらえるものとして「メタ認知」を据えた。

この五つの柱は，学習指導要領に記された各領域とはまた別の観点から，言語を扱う国語の授業をとらえるために仮に置いた観点であり，あくまで，教師が授業を見取るときの着眼点としての提案である。また，これらの五つの柱は，毎時間の授業で必要となる観点とも考えていない。単元を通しての比重や，授業の目的や内容によって，取捨選択されるものと考えているため，年間を通して育成することをめざした五つの柱ととらえている。今回は，これらのうち，特に「思考力」（ひとまず，選択に関する思考としてとらえる）と「メタ認知」に則して，公開研究会の授業について考えてみたい。

まず，小学校の文学的文章の授業においては，教科書中に青（「食べたい気持ち」の根拠となる箇所）と赤（「仲間意識」の根拠となる箇所）のサイドラインを引いた心情の読み分け，きつねの心情を比較する形で構造化した板書，挿絵の表情への着目など，心情について考えさせる手立てを複数用いている。児童はこれらを手がかりとしながら，毎時間の最後に「きつねになりきった日記」を書くことで，授業の中で得た情報を再構成し，表現しながら理解を深めている。授業の中で得た情報から日記の記述までの思考過程では，児童が記述する内容に関連した情報が「自ずと選び取られる」。そして，ここに選択の萌芽となる部分を見ることができよう。これに対し，中学校「書写」の授業では，百人一首の中から行書で書く対象となる短歌やそのための道具を生徒が選ぶ場面を設けている。選択の文脈から考えた際，小学校と異なる点は，選択が自覚的，意識的に行われるという点である。

今回の小学校の授業における児童の思考過程の説明において，自覚的なものというよりも，むしろ「自ずと選び取られる」と表現したのは，授業内での選択をどの程度子どもに任せるかは，扱う教材の内容，程度と子どもの認知発達との関係によって，判断されるものだからである。特に小学校低学年という段階と扱う教材の内容とから考えた場合，今回の小学校の授業の文脈では「メタ認知」の側面をそれほど強く求めるべきではない。「ふりかえり」を授業の内容から分離させ，扱いの比重を下げているのもその一つのあらわれであると考える。これに対し，中学校では，はじめに前時の学習内容を俯瞰的に問う発問から始まり，次に生徒が自覚せずとも自ずと書けている行書の部分を複数取り上げながら，指導としておさえ，その後，百人一首の選択，筆記用具の選択へと移っている。今回の中学校の授業は，学習活動全般の根底に流れるものとして「メタ認知」を据えたものであり，これは，中学校２年生という年齢とこれまで生徒が習得してきた書写の知識と技能，および今回扱う内容によって可能になったものと考えられる。したがって，どの学年，どの単元，どの授業でも，「メタ認知」で貫くことができるかといえば，必ずしもそうではない。

当面の課題としては，子どもの発達や既習の学習事項，教材の特性などとの関連の中で，引き続き五つの柱という枠組みそのものの検討やその内容を精緻化することを考えている。

（共同研究者：言語文化教育講座，田中　耕司）